

## 光源氏の柏木評価

——若菜下巻における光源氏・柏木の対座場面をめぐって——

姥澤 隆司

### 一 はじめに

女三宮との密通の事実が光源氏に露見したことを知って以来、光源氏への恐懼のあまり蟄居していた柏木は、女三宮主催の朱雀院五十賀の試楽の席にいわば監修役として招かれ、辞退することもかなわず、六条院へ参上する。

光源氏と柏木の久し振りの対座は二度描かれる。試楽催行前の参上挨拶の場面と試楽催行時の宴席の場面である。前者は、無沙汰の挨拶という範囲を越えた長い対話となっている。後者は、光源氏の一方的な語り掛けではあるが、この後に柏木を死病の床に臥せさせることとなる重大な場面である。

右の、参上挨拶↓試楽↓光源氏発言という構成は、最終の光源氏の発言面に頂点があるのは勿論だが、参上挨拶の対話内容から引き出される光源氏と柏木の凝縮された関係にも重要な意義があるものと考えられる。

本稿では、光源氏と柏木との対話で発せられもし思惟されもする言葉の持つ役割を検討することで、最終場面での発言に至る光源氏にとって柏木の存在がいかなるものであったかを明らかにしたい。

### 二 最初の対座

十二月十余日と決まった試楽の出席者として、柏木がすぐに呼び出されるわけではない。二条院で静養していた紫上、皇子を出産した明石女御、玉鬘、そして欠席だが花散里。これだけの人々を列挙した上で、柏木に言及される。それも、「人あやしとかたぶきぬべきことなれば」(三九九頁<sup>1</sup>)という断りを述べた上でのことである。もつとも、これは、この場面の直前で光源氏が試楽の日取りを考えあぐねる箇所<sup>2</sup>で、ほぼ同じ表現で柏木のことを考えているところを引き継いだものである。

衛門督をば、何さまの事にも、ゆゑあるべきをりふしには、必ずこ  
とさらにまつはし給ひつゝ、のたまはせ合はせしを、絶えてさる御  
消息もなし。人あやしと思ふらんとおぼせど、  
三九八頁

衛門督を、かゝる事のおりもまじらはせざらむは、いとほえなくさ  
うくしかるべきうち、人あやしとかたぶきぬべきことなれば、  
まゐり給ふべきよしありけるを、  
三九九頁

一目瞭然と言えよう。柏木に対して全く同じ評価を下した上で、前者では六条院へ招請の手紙は出さないといい結論になり、後者では招請の

手紙を出すこととなる。勿論、その差は試案という一大催事が開かれるか否かの違いによるのだが、柏木を呼び出すまでにくどいほどの手順を尽くしていることに注意して良いであろう。それは、読者に対して、柏木の一挙一動に注意せよ、という合図であることは言うまでもない。

柏木への招請はまずは辞退される。そこで、光源氏は「思ふ心のあるにや、と心ぐるしくおぼして、とりわきて御消息遣はず。」(四〇〇頁)のである。「心ぐるしくおぼして」という表現に特段の注意を払いたい。「光源氏には柏木の胸中がはかれる。(中略)光源氏にはそれだけの余裕があつたわけである。」と評されているところである。「心苦し」とは「自他の区別がなくなつて、他者の苦痛・不幸で心の痛むさまにいう。」<sup>3</sup>意とされている。思い遣る相手への共感の心情を表す言葉である、と解釈できる。少なくとも、光源氏は柏木の現在の心境に対して理解する心を持っているのだ。最終場面の光源氏の発言に向けて重要な前提となる記述である。

柏木が六条院に到着したのは、「まだ上達部などもつどひ給はぬほど」(四〇〇頁)であった。早々の到着の理由は、「まず源氏と二人だけの対座をしておいたほうが無難と考へたか。」<sup>4</sup>とも解釈されているが、一義的にはこの後の光源氏・柏木の対座場面を作るための作者による設定であつたことは明らかである。

対座場面での柏木の待遇が「例のけ近き御簾の内に入れ給て、母屋の御簾おろしておはします。」(四〇〇頁)ものであるのは、朱雀院五十賀の試案の監修役として招請されたという半ば公式催事に関わることであ

り、主催者の准太上天皇と招待客の衛門督という身分差を考えれば当然のことだと言える。

しばらくぶりに対座した柏木の様子は光源氏の目に次のように映つた。

げにいといたくやせ／＼に青みて、例も誇りかにはなやぎたる方は、おとうとの君たちにはもて消たれて、いと用意あり顔にしづめたるさまぞことなるを、いと／＼しづめてさぶらひたまふさま、なかは御子たちの御かたはらにさし並べたらむに、さらにとがあるまじきを、たゞ事のさまの、たれも／＼と思ひやりなきこそ、いと罪ゆるしがたけれ、など御目とまれど、

四〇〇頁

「いと用意あり顔にしづめたるさまぞことなるを、いと／＼しづめてさぶらひたまふさま」と、柏木の「しづめたる」態度が強調される。「しづめたる」とは、第一部に登場して以来、柏木を性格つける代表的な形容語であり、「柏木は日常的現実においては「しづめたる」存在以外ではありえないのである。」<sup>5</sup>。致仕大臣家の総領としての柏木の存在は全く右の評言の通りであり、この対座場面での柏木の在り様もその域を出るものではない。即ち、光源氏は柏木の社会的立場を正当に評価していることになる。

続いて、光源氏の心中が語られる。「思ひやりなき」という言葉に着目したい。「思ひやり」とは「人の立場や身の上をよく考へてやること」という意味の語である。従つて、「思ひやりなき」とは、自分の行為が他の人々にどのような影響を与えるかを考慮できない、想像力の欠如を

指すものと考えて良いであろう。「女三の宮も柏木も、自分(光源氏)を無視した、という思いである。」とする解釈には同意できない。前述した、光源氏の柏木への「心ぐるしくおぼして」という共感、即ち「思い遣り」の記述とも矛盾することになる。「どちらにしても、まったく無分別であつた」という、客観的な立場からなされた密通事件への評価に発するものと考えるのが相当であろう。強いて光源氏の個人的な怒りの感情に引き付けて解釈しなければならぬ必然性は認められない。

当然のことながら、対話の口火を切るのはより高い身分の光源氏である。光源氏の口調はすこぶる丁寧なものだ。朱雀院五十賀の女三宮主催行事が延引した理由を詳細に説明した上で、柏木に試案の監修役を依頼した理由を述べるのである。

家に生ひ出づる童べの数多くにけるを、御覽せさせむとて、まひなど習はしはじめし、その事をだに果たさんとて、拍子とゝのへむこと、又たれにかは、と思ひめぐらしかねてなむ、月ごろとぶらひものし給はぬうらみも捨ててける

四〇二頁

計画した行事の内容も、光源氏の孫達の舞を中心にした内輪の催事としている。これは、後に描かれる当日の試案の内容に合致するものであり、当初計画された六条院の女性達による女樂が紫上の発病によって催行が危ぶまれることを考慮すれば、事実としての最終案を述べたに過ぎないのかもしれない。だが、それが事実としても、子供達の舞の監修ということになれば、病氣を理由に一度は辞退した柏木の精神的負担を軽くする方向に働く発言であると言えるであろう。そのことは、光源氏の

発言の末尾の柏木の疎遠に触れた「月ごろとぶらひものし給はぬうらみも捨ててける」という言葉にも当てはまる。柏木が光源氏に対して疎遠であつたことは事実であり、そのことについては触れないでおくわけにはいかない。どちらから言い出すかという点については、疎遠という事実を引き起こした柏木から弁明乃至は陳謝があるのが順当である。だが、そうした場合は、柏木がひたすら陳謝し、光源氏がそれを許すという形しか有り得なくなる。柏木にとって多大な精神的負担となる事態である。それを避けるために、光源氏から、柏木が依頼を承諾してくれば過去の不義理は不問に付す、という発言がなされたわけである。光源氏の思い遣りが発揮された場面設定と読むべきであろう。

勿論、柏木にとつては、光源氏の発言の一言一言が自分に対する含みを持つた言葉と受け止められるのは、柏木の心中に抱く良心の呵責によるものであり、客観性を欠いたものとなることは止むを得ない。柏木の心理に即して光源氏の発言の真意を探ろうとすることは、理解の平衡を欠く恐れがあることに注意しなければならない。

光源氏の懇切な挨拶に忸怩たるものを感じながら、柏木は立派な挨拶を返す。まず、日頃の無沙汰を「脚病」によつて蟄居していたためだと説明する。良くある病であり、納得の行く説明である。そして、朱雀院五十賀の話題に移る。

院の御齡足りたまふ年なり、人より定かに数へたてまつり仕うまつるべきよし、致仕のおとゝ思ひおよび申されしを、「冠を掛け、車ををしまし捨ててし身にて、進み仕うまつらむにつく所なし。げに

下らうなりとも、おなじごと深きところ侍らむ、その心御覽せられよ」ともよほし申さるゝことの侍りしかば、おもき病をあひ助けてなん、まゐりて侍りし。いまはいよゝいとかすかなるさまにおぼし澄まして、いかめしき御よそひを待ちうけたてまつり給はむこと、願はしくもおぼすまじく見たてまつり侍りしを、ことどもをばそがせ給ひて、しづかなる御物語りの深き御願ひかなはせ給はむなん、まさりて侍るべき

四〇一頁

自分の妻、女二宮主催の賀宴を父致仕大臣の主催であるとして、女三宮主催の賀宴との競合を避けようとする。また、朱雀院の近況を語ることで、女三宮主催の賀宴が朱雀院の意思に添うものであることを強調するのである。「ことどもをばそがせ給ひて、しづかなる御物語りの深き御願ひかなはせ給はむなん、まさりて侍るべき」とは、先の光源氏の内輪での賀宴の計画を最適の趣向だと称揚するものである。すべてに亘つて謙虚な態度に終始して光源氏を立てようとする柏木の配慮に、光源氏も「労あり」と思うのだった。そして、この「労あり」という評言に表される「心遣いが行き届いている」ことこそが光源氏が自他ともに求めることであり、密通事件を引き起こした柏木に欠けていたものでもあるのだ。

柏木の当を得た返答を受けて、光源氏は改めて柏木を賞賛する。

たゞかくなん、事そぎたるさまに世人は浅く見るべきを、さはいへど心得得ものせらるゝに、さればよとなむ、いとゞ思ひなられ侍る。

四〇二頁

「あまりに簡略化した催事の計画で世間の受け取り方が心配だったのだが、柏木の賛同を得たので自信が付いた、というわけだ。世事万般至らぬことのない光源氏から、柏木の判断に依存して催事を実施する決断が出来た、と言われるのだから、柏木としてこれに優る面目はない。その上で、改めて嫡男夕霧とともに試楽の監修を依頼されるのである。光源氏の発言に隠された意図を探る余地はない。

柏木自身についても、「うれしきものから苦しくつましくて」（四〇二頁）という反応が描かれる。「苦しくつましくて」とは、柏木個人の光源氏に対する良心の呵責による恐懼の念で感じられたことであり、光源氏の発言の意図とは無関係である。光源氏の発言内容自体は、柏木にとって「うれしきもの」とすべき光榮な賞賛以外では有り得ないものだったのである。

「源氏と柏木との典雅な対座は、それぞれの凄絶な内面を辛うじて抑える努力によって表現されている。」<sup>11</sup>という評言は、柏木には当てはまっても、「それぞれの凄絶な内面」と指摘されるほどの纏れ乱れた心境に光源氏があるということは言えないものと考ええる。これまで見てきた如く、光源氏の発言は、柏木の現況に即した、配慮に満ちたものであり、思い遣りの感じられる丁寧さで一貫していた。その丁寧さは、対座場面の状況に適った言葉遣いを選んだものであり、その裏に隠された意図を秘めた慇懃無礼を読み取れる体のものではない。密通発覚以来、光源氏はその事件について繰り返し考えを巡らし、それによって生じた自身の感情の動揺についても実感して来たのである。その一つの結論が、自身

の藤壺との過去に照らし合わせた宿命の把握であり、恋愛一般の無謀さへの認識であった。

勿論、光源氏の柏木に対する複雑な感情が全て消滅したわけではない。一度味わった感情は薄れはしても失くなりほしくない。それを抱え込んだ上で包容力のある対応が出来るのが、准上天皇光源氏の本領である、と受け取るべきであろう。

### 三 宴席での対座

光源氏の前を「逃げ去るように退座」<sup>12</sup>した柏木は、夕霧が用意した楽人、舞人の装束を手直しする。夕霧が出来る限り趣向を凝らしたのも、柏木の細やかな配慮で一層引き立つ出来栄となる。「げにこの道はいと深き人にぞものし給ふめる」(四〇三頁)。先の光源氏の賞賛を受けた記述である。ここでも、柏木の芸術面での力量への評価は客観的観点からも一貫していることに注意したい。

以下、光源氏の言葉にあった通りの童舞が披露される。その出来栄えは絶賛されるし、出席した老人達は感涙に咽ぶ。光源氏の一言が発せられるのはまさにその感動の最中である。

過ぐる齢に添へては、酔ひ泣きこそとゞめがたきわざなりけれ。衛門督心とゞめてほ、笑まるゝ、いと心はづかしや。さりとも、いましばしならん。さかさまに行かぬ年月よ。老いはえのがれぬわざなり。  
四〇四頁

「酔ひ泣き」をしているのは「老い給へる上達部たち」であり、光源氏も泣いているとは記されていない。つまり、発言の冒頭部は、眼前の老上達部達の有り様を実例として、一般論を述べたということになる。続いて、柏木に発言の対象が向く。柏木がその様子に気付いて冷笑している、と指摘する。問題は、この指摘が「いと心はづかしや」という言葉で受けられていることである。「なんともきまりがわるいことですよ」と解釈して良からう。光源氏は泣いてはいないのだから、この言葉は現に泣いている老上達部達に代わって弁明した、ということになるだろう。柏木が「心とゞめてほ、笑」む相手を光源氏だと解釈してしまうと、「源氏を畏怖する柏木が嘲笑するはずのないことを知りつつも、わざわざ、柏木が老醜の自分を蔑視しているとして、皮肉に転ずる。」<sup>13</sup>というような理解になってしまう。この理解では、光源氏の発言は事実(柏木は光源氏を冷笑していない)を歪曲した悪意あるものになる。前述した最初の対座場面での光源氏の柏木に対する丁寧な応対とはあまりに懸け離れた態度に過ぎるのではないか。その間の飛躍を合理的に説明できる根拠が見つからない。無理な解釈だと判断せざるを得ないのである。

では、「いと心はづかしや」とはどのような意図による発言なのか。直接的には老上達部達に代わって弁明したという体を取りながら、光源氏自身も老上達部達と何ら変わらない、時には「酔ひ泣き」もする無様な老人の一人である、という表明だと考えて良いだろう。ここまでは、自身の老いを客観視した上で自嘲だと言える。ところが、光源氏は更に柏木に焦点を当てて言葉を続ける。「さりとも、いましばしならん」。

光源氏の老いと対照させた柏木の若さを挙げつらい、その若さがいかに  
はかないものであるかを指摘する。以下に続く言葉はその指摘の反復で  
しかない。

なぜ、光源氏は急に柏木の若さに固執するのか。その若さの持つ価値  
を永続性のないものとして否定乃至は軽視しようとするのか。光源氏は  
衆人注視の中で柏木を笑いにしようとしたわけではない。光源氏の発  
言はそのような効果を發揮する内容にはなっていない。むしろ、人間全  
般の老いから免れぬ悲しみ（ただし通俗的概念ではあるが）を嘆いたに  
過ぎない。たまたま、その場に対照的な老上達部達と柏木がいたから引  
き合いに出した、とも考えることができる。引き合いに出された柏木は  
迷惑だろうが、宴席の軽い戯れ語という範囲を出ない。そこに、光源氏  
の底意が隠されていたか否かは、光源氏の発言自体からは付度できない。  
確かに「さしわきてそら酔ひをしつゝかくのたまふ」という記述はある  
が、これが語り手の客観的な説明であるという証拠はない。

人よりけにまめだち屈じて、まことにこちもいとなやましければ、  
いみじきことも目もとまらぬこちする人をしも、さしわきてそら  
酔ひをしつゝかくのたまふ、戯ぶれのやうなれど、いと胸つづれ  
て、

四〇四頁

光源氏の発言を受けた柏木の様子を描いた部分だが、「まことにこち  
ちもいとなやましければ」という表現に明らかのように、柏木の心境に  
添った記述になっている。つまり、「そら酔ひをしつゝ」という光源氏  
の行動についての記述は、柏木の受け止め方を述べたものである可能性

が大きいのである。この記述をもって光源氏の発言に柏木を揶揄する意  
図を見出すのは性急に過ぎよう。

あるいは、光源氏の胸奥に柏木の若さに対する羨望が隠されていたか  
もしれない。だが、それはすべて推測の域を出るものではない。物語の  
記述は確実な手掛りを与えてはくれない。確実なのは、この発言が柏木  
には痛烈な叱咤とも皮肉とも感じられたということである。だが、それ  
は柏木の抱える個人的問題による過剰反応と言える事柄である。

この後、光源氏は柏木に度々盃を勧める。

盃のめぐり来るも頭いたくおぼゆれば、けしきばかりにて紛はずを  
御覧じとがめて、持たせながらたび／＼しひ給へば、はしたなくて  
もてわづらふさま、なべての人に似ずをかし。

四〇四頁

言葉だけを辿れば、光源氏が未だ病癒えぬ柏木に酒を無理強いている  
ようにも読める。だが、この宴席は朱雀院五十賀のための催事の準備  
が滞りなく終了したことへの慰労の意味を含むものである。従って、急  
な依頼である童舞の監修役を立派に務めた柏木が試業の主催者である准  
太上天皇光源氏から特に指名されて慰労の盃を重ねることは、光榮以外  
の何ものでもない。「結局何杯も飲ませるのは、座興として何時もなら  
喜んでお相手し、特にさされたことを光榮とし、一座にも見せびらかし  
たのだが、今日は胸がつかえて飲めないのである。」<sup>15</sup>という指摘は正鵠  
を射ているものと言つて良い。

果たして、光源氏は柏木の苦衷の心中に気付かないのか。気付いてい  
る、という記述はない。「御覧じとがめて」を「柏木の酔ったふりのご

まかしを容赦しない源氏の、鋭くきびしい視線。前の「うち見やりたまふ」が持続される<sup>16</sup>とする見解もある。「御覧じとがめて」自体は「見咎める」意であるから、柏木のごまかしを目敏く見つけてもつと酒を飲むように勧めた、ということである。「容赦しない」という表現は強過ぎるのではなからうか。「源氏の、鋭くきびしい視線」という表現は柏木の視点に寄り添い過ぎていよう。同座の者から客観的にそのように見えたとわけではない。柏木にはそのように感じられた、ということである。また、「うち見やりたまふ」という表現は、「関心を示してそのほうへ視線をやる<sup>17</sup>」という程度の意であり、「なみ居る人々のうち、柏木だけを注視<sup>18</sup>」「目をおすえになる<sup>19</sup>」という解釈は光源氏の行為を強調し過ぎるのではないかと、と考える。引用本文の末尾に着目したい。「なべての人に似ずをかし」とは、誰からの評言か。語り手による言葉と捉えるのが穏当だろうが、柏木に語り掛け、その様子を眺めていた光源氏の視点も入っていると考えerことはできないだろうか。光源氏には柏木を試す気持ちが少々あつたかも知れない。柏木に語り掛けた。柏木に盃を取らせた。柏木は困惑しながらもさりげなく振舞うことができた。宴席の場の雰囲気を壊すことがなかった。そのことを光源氏は評価しているのではないか。たとえ、そこまで踏み込まなくても、語り手がこの場の柏木の振る舞いを肯定的に扱っていることは認められるだろう。即ち、光源氏が柏木に満座の中で注目を浴びさせて困らせている、と考えるのは柏木だけなのであり、柏木の特殊な事情がそのような理解をもたらすのである。

この場面は、光源氏の何気ない一言が柏木を死病の床に追い込むこと

を意図して設定されている。「その為には、何か一件をほのめかすにも似た源氏の言葉があれば足りたのであり、言葉の内容はこの場合、決定的な意味を持ち得てゐない<sup>20</sup>」という指摘の通りである。すべては柏木の側に原因があつたのであり、強いて言えば、光源氏は意図しない加害者の役割を負わされることになつたに過ぎない。

勿論、これは若菜下巻の試案での対座場面での有り様であつて、光源氏にとつて柏木の存在が何者でもなかつたということの意味するわけではない。光源氏にとつて柏木の存在意義を考える機会はこの対座場面以前に存在し、既に決着していたということである。

#### 四 むすび

女三宮・柏木密通事件の事実を知つた光源氏の苦悩は並一通りのものではなかつた。特に、その苦悩の中核をなすのは、事件の秘密を漏洩させてはならない、ということであつた。これは、正妻を年若い貴公子に寝取られたという世俗的恥辱が暴露されることを嫌う自己保身に発するばかりではない。兄朱雀院から委託された女三宮を十分に監督・養護できなかつたという自責の念によるものでもあつた。<sup>21</sup> 事実を隠匿しおおすには光源氏の細かな配慮と自制が必須であつた。結果的には、光源氏はその意図を貫徹することができた。それは、柏木の行為を自身の若き日の秘密の行為と重ね合わせることによつて、光源氏が一つの納得を得たためだ。言うまでもなく、藤壺との秘事である。「老の苦い自覚を反芻

しながら、かつての自己の父帝に対する裏切りを想起して、かれらに石を投げ打てぬ自らの位況を思い知らされる。」<sup>22</sup>と言われる通りである。柏木は、光源氏にとって「裏返された自分自身」<sup>23</sup>であり、「柏木を否定すること即わが存在の否定以外ではありえないからではないか。源氏はわが存在の根基の秘められた暗部の恐るべき明確な投影として柏木を見るに至った。」<sup>24</sup>とも指摘されている。もつとも、だからと言って、光源氏は因果応報の道理に思いを致して罪の重さに改めて怯える、というわけではない。藤壺との秘事はそれらの世俗的倫理乃至は論理を超えたところで成立した事柄であった。

だが、密通事件の秘匿を通じて、光源氏は自己の感情を無理をしてでも押さえ込む必要があった。そこに新たな苦悩が生じる。その苦悩に堪えて行くところに晩年の光源氏の在り様もまた見えて来るのであろう。

- 注1 引用本文は『新日本古典文学大系 源氏物語三(岩波書店 平七)に拠り、頁数を示す。
- 2 西木忠一「さかさまに行かぬ年月よ」——試菜の夜の光源氏——(『樟蔭国文学』30 平五・三) 一頁。
- 3 『角川古語大辞典 第二卷』(角川書店 昭五九) 四四六頁。
- 4 阿部・秋山・今井・鈴木『新編日本古典文学全集 源氏物語四』(小学館 平八) 二七四頁の頭注八。
- 5 高橋亨「源氏物語の△ことば▽と△思想▽」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会 昭五七——初出昭四八) 二二三頁。
- 6 『角川古語大辞典 第一卷』(角川書店 昭五七) 六三四頁。

- 7 注4の二七五頁の頭注十五。
- 8 注4の二七五頁の現代語訳。
- 9 注2の西木論文に詳細な論述がなされている。
- 10 『角川古語大辞典 第五卷』(角川書店 平一一) 八八五頁。
- 11 注4の二七八頁の頭注・印。
- 12 注4の二七八頁の頭注一。
- 13 注4の二八〇頁の現代語訳。
- 14 注4の二八〇頁の頭注五。
- 15 玉上琢彌『源氏物語評釈 第七卷』(角川書店 昭四二) 四九九頁。
- 16 注4の二八〇頁の頭注十三。
- 17 注10の五四四頁。
- 18 注4の二八〇頁の頭注八。
- 19 注4の二八一頁の現代語訳。
- 20 石田穰二「柏木の死について——悲劇的なるもの——」(『源氏物語論集』桜楓社 昭四六——初出昭二八) 二八頁。
- 21 姥澤(負託)に込え続けるといふこと——若菜下巻における光源氏の女三宮説論——(『北海道文教大学論集』第一号 平一一・三)。
- 22 伊藤博「柏木の造型をめぐって」(『源氏物語の原点』明治書院 昭五五——初出昭四二) 二八八頁。
- 23 島内景二「柏木物語の成立——源氏物語第二部の基層——」(『国語と国文学』昭六一・八) 三七頁。
- 24 秋山慶「柏木の生と死」(『講座 源氏物語の世界 第七集』有斐閣 昭五七) 一一頁。